

初診 2015.6.
1950 年生まれ 65 歳 男性
主訴 11 番歯の破折により補綴希望

咬合力が大変強く今までも多数歯の破折の既往があった。今回 11 番生活歯が破折したためインプラント治療を希望された (図1)。唇側既存骨をできるだけ温存し治療期間の短縮を図るため、Legacy1 インプラント直径 3.7mm 長さ 11.5mm を使用して抜歯即時埋入を計画した。抜歯はペリオトームを用い、骨に対してできるだけ愛護的に施術した。切開線は抜歯窩口蓋側のみに設定して唇側の歯肉歯間乳頭温存を図った。抜歯窩口蓋側の骨頂部直下に起始点を設定し (図2)、ステップドリル形状の Legacy ドリルにて埋入方向に注意しながら骨床を形成した。このドリルは全てステップ形状になっていて、削り出しの回転が大変安定しているため、皮質骨のチップング防止に優れた効果があり、使用感は良好である。テーパードボディーのフィクスチャーは 2 重螺旋構造のスクリューで、埋入時少ない振れでセルフタッピングでき強固な初期固定を得ることができる。今回もトルクレンチ計測で最終トルクは 45Ncm で埋入した (図3)。フィクスチャーと抜歯窩の唇側ディフェクトは、インプラント頸部で約 2mm 程度であったため、抜歯窩に Bio-Oss を充填した (図4)。プロビジョナルをできるだけ早期に

安定した状態で装着するため、インプラント埋入時に、トランスファーコーピングを使用してプロビジョナル製作のための印象採得をおこなった。本来 Legacy1 のキャリアーは、口腔内デリバリーと埋入のみの使用であるが、筆者はプロビジョナル印象用コーピングとして大変便利に使用している。さらにインプラントボディーとキャリアーはアンダーカットで接合されているため、事前にスクリューを緩めるなどの余計な操作は必要とせず、ワンモーションで術野にデリバリーでき、ストレスがない。ストレートのヒーリングカラーを装着して 1 回法の手術を終了した (図5)。14 日後、スクリュー固定のプロビジョナルを装着した。この時のペリオテスト値は -7 であった (図6~8)。術後 3~4 週に一時的にインプラントと骨の接触関係が緩む。この時期にはフィクスチャーに外力をかけることは禁忌であるので、それ以前にプロビジョナルを装着した。中心咬合位はもちろんのこと前方側方運動時にも対合歯との接触は無いように咬合調整した。患者にはプロビジョナルでできるだけ咬まないように指示をした。この状態で 3~4 ヶ月経過観察し、骨ならびに歯肉の安定を待つ。歯頸ラインは最終補綴装着までに揃える予定である。

シンプルかつ大変堅牢な構造で補綴までシステム化された Legacy インプラントはインプラント臨床において大変心強いアイテムである。



図1. 生活歯の11番が破折した。12番は既に補綴されておりインプラント治療を希望された。



図2. 口蓋側のみフラップを形成して、起始点を口蓋側に形成した。



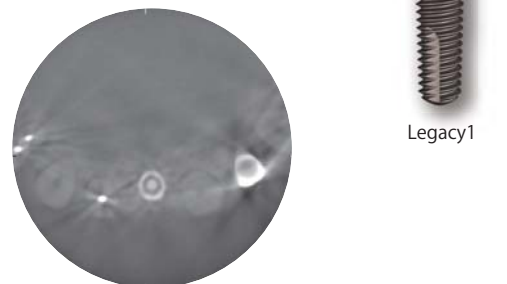
図3. 歯軸方向に注意して埋入した。



図4. Bio-Ossを充填した。



図5. 埋入直後のCT画像。下顎対合歯との位置的関係は良好である。抜歯窩に充填されたBio-Ossが確認できる。ヒーリングカラーはストレートを使用して歯肉を圧迫しないように配慮した。



Legacy1



図6. 完成したスクリュー固定のプロビジョナル。



図7. 術後14日経過時点の状態。審美エリアでのインプラントポジションは既存歯の舌側ラインに揃えることが重要。治療は良好である。



図8. プロビジョナル装着の状態。